

病気概念の三要素  
小椋宗一郎（東海学院大）

本発表は、〈病気〉という概念を、客観的・主観的・社会的という三つの契機に分けて考察することによって、動的な理解が可能となるよう整理することを目指す。まず病気の客観的契機は、C・ボースの「生物統計理論」によって代表される。ある生物種において定型的であり、生存と生殖に役立つような「正常な機能充足」が低下した状態が「病気」と呼ばれる。しかしノルデンフェルトによれば、たとえば感染症の場合には、細菌やウイルスが侵入し組織を破壊すると、身体はすぐさま体温を上昇させたり抗体を作ったりして病原体に対抗する。これはまさにわれわれが「病気」と呼ぶ状態のはずだが、生物統計理論では身体による「健康な応答とみなされてしまう」。このように、単に客観的な病気の理解は、われわれの主観的な理解から著しく乖離することがある。

主観的意味での病気は、「病い(illness)」という言葉で語られる。これは、痛みや苦しみ、疲労感や不安などとして、それぞれの個人に感じられるものである。ただし、つま先をぶつけて痛みを感じる時にはそれを病気だとは思わないが、いつまでもジクジクと痛むときには病気を疑うといったように、それぞれの人が自分の状態を解釈することが必要である。かれは病院を訪れて客観的にも「病気」であることを確認しようとするかもしれない。その意味で、客観的／主観的な病気理解は、相補的であるといえる。

医師と患者の関係のもとで社会的意味での病気を解明したT・パーソンズの理論は、依然として重要である。周知のように、パーソンズは社会が患者に「病人役割 (sick role)」を期待するしくみになっていることを明らかにした。病人役割の第1の要素として、「通常の社会的役割責任が免除される」。第2に、病気は本人のせいではないとみなされ、回復のために病人が自分の意志で何かをすることは期待されていない。むしろ援助を受け入れる態度を示すことが求められる。ところが第3に、病人は「回復を欲することを義務付けられる」。医師が処方した薬を飲まなかったり、安静を命じられた病人が動き回ったりすれば、“治りたくないのか！”とお叱りを受ける。第4に、「技術的に適格な援助を求める」こと、つまり医師と「協力する」ことが求められる。

しかし、例えば優生保護法下で不妊手術を強制された被害者たちは、病気や障害を理由として社会的責任を免除されるどころか、否応なく断種処置を受けさせられたのである。それを医療による「援助」とみなすことは、どう考えても無理がある。断種は、回復不可能な生殖機能の毀損を意味し、被害者たちの人生に重大な苦悩を与えた。

また例えば「不妊症」は、社会的意味づけが作り出した病気である。定義上、生殖機能の障害があること以前に、当事者が子どもを望んでいるという前提が不可欠だからだ。苦痛や苦悩、高額な出費を伴うにもかかわらず、近年、体外受精を受ける人の割合が急増している背景には、いったい何があるのだろうか。こうした問題について議論

《第1分科会》  
健康イデオロギーと病気概念

するために、少しでも有益な示唆を与えられるよう努力したい。